



TITLE:

Mir fällt zu Hitler nichts ein : カール
・ クラウスと素材の問題にふれて

AUTHOR(S):

佐藤, 康彦

CITATION:

佐藤, 康彦. Mir fällt zu Hitler nichts ein : カール・クラウスと素材の問題
にふれて. ドイツ文学研究 1975, 21: 30-59

ISSUE DATE:

1975-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184952>

RIGHT:

Mir fällt zu Hitler nichts ein

——カール・クラウスと素材の問題にふれて——

佐 藤 康 彦

クラウス論、あるいは作品研究といったまとまったものではございませんが、約三百ページに及ぶ作品『第三ワルブルギスの夜』の冒頭の一文章、それも半行ほどの *Mir fällt zu Hitler nichts ein.* について考え、それと関連して作品の成立事情と、さらにこの一文から窺われるクラウスと素材の関係についてふれることに致します。

はじめに、個人的な経験からお話することをお許し願いたいと思います。この作品をわたしどもが読み始めましたのは五年ほど前になります。わたしどもと申しますのは、武田昌一先生と高木久雄先生とわたくしでありまして、この三名は偶然それぞれ十年ほどの年令の差があり、いわば戦前、戦中、戦後派として経験を異にしており、とくにわたくしは、クラウスがこの作品の執筆に没頭していた一九三三年の春から秋にかけて、ちょうど

生まれる直前だったものですから、ヒットラー抬頭期の直接的な記憶をもってはおりません。しかし体験や見聞ということ抜きにしても、この作品の難解さは相当なもので、読み合わせは遅々として渉らず、長い経験をお持ちの両先生も、これまで読んだものうち最も難かしいものの一つだと洩らされたことがありました。

この難解さは、作品中に引かれている約百名にのぼる有名・無名の実在人物たちや、多数の新聞、雑誌、ラジオの発言や記事といった資料面からくるものであるとともに、クラウス独自の諷刺論争の技法、技法というには余りにも身についた生得ともいえる発想、ほとんど全ての文に Ironie や Satire がこめられているという一言ではないような執拗な Polemik の姿勢、ものに憑かれたようにたたみかけてゆく激越な文体表現から生じます。

資料面の困難さといえますのは、出典や事実関係ということもありますが、むしろ、当時その場にあった者にかわからぬ暗示的な指摘とか、有名人士の口調 (Tonfälle) とか、また、攻撃される言説や作品からの辛辣な愚化引用 (ad absurdum zitiieren) や、それと対照されるゲーテ、シェイクスピア、ニーチュなど多数の文学作品からの引用が、地の文にとけ込んでいるといった点にあって、その意味で、クラウスの表現技法上の難解さと資料・素材面での難解さは不可分に結びついているということが出来ます。ところで、これまでこの作品のコメンタールはもちろん、素材的な研究はまだ出ておりません。わずかに、一九六七年になって、選集と同じく Kösel から出された Einmalige Sonderausgabe に Wilhelm Alf とうう歴史家の書いた Karl Kraus und die Zeitgeschichte [1927—1934] というのが付けられておりますが、これは概観的なもので、しかも主として当時のオーストリーの政情に説明の筆が向けられています。これはおそらく、クラウスの時代と同様に今また国を異

にし、オーストリーの事情にうといドイツ人の読者のために第一に考えられているためだろうと思われれます。

幸い、一九七〇年から七二年までヴィーンに滞在し、この作品に関する資料を調べる機会がえられました。オーストリーは、ご存知のように、一九三八年、この作品が書かれた五年後にナチス・ドイツに武力併合されましたし、ヴィーンは第二次大戦末期に空襲と市街戦によって破壊され、また戦後は徹底した非ナチ化が行われたといわれますが、当時の新聞や出版物は、ナチス側、反ナチス側を問わずかなりよく保存されておりました。⁽¹⁾ヴィーン人はみずから 'Toleranz' と称しますが、ドイツ人からはいわゆる「ヴィーンの曖昧さ」と評されるような社会的空気が、このような資料の残存をゆるしたのでしょう。同じころの資料をベルリンにいた知人に調査願ったことがあります。あのドイツの徹底性をもってしても、いやむしろその徹底さのゆえにでしょうが、探索がずっと困難であるような印象をうけました。この時代の資料は、あんがい、オーストリーに多く求めることができます。むしろ、ヴィーンにおいても、この作品のクラウスの自筆草稿のように、ナチス・SAの手によって葬られたものも多かろうと想像されますが。⁽²⁾

ところで、一九七一／七二年の冬学期に、ヴィーン大学では、Werner Welzig 教授によって、クラウスの第一次大戦期を素材とする大作『人類最期の日々』Die letzten Tage der Menschheit がゼミナールにとり上げられました。このゼミナールに加わっていた Wendelin Schmidt-Dengler 助手のいうところでは、これは保守的なヴィーンのアカデミズムにとって画期的なことであり、おそらく、ドイツ、オーストリーの大学でクラウスが主題として論じられる最初ではなかつたかということでした。きわめてアクチュアルな時代論争家として、生前はほとんど憎悪や当惑の念とともに黙殺され、第二次大戦後は、逆に、新しい文学思潮のなから、しかもや

やジャーナリストイックに喧伝されてきたこの作家が、研究対象としてアカデミズムにとり上げられることは、何よりも、クラウス死後三十五年、戦後三十年をへて、ようやくこの「時代に縛られた」(zeitgebunden)論争家の時代を超えた問題性、そして、作家をはなれた作品の自立性が公認されるにいたったことを物語っているといえましょう。

やがて、Schmidt-Dengler 氏には、その後、長期間にわたって『第三ワルブルギスの夜』の内容や表現について教示をえることができましたが、その初めの頃、同氏はわたしに向って「この作品の冒頭の文章『Mir fällt zu Hitler nichts ein』は、日本語に訳すとどうなるのか?』とたずねました。この一文をどう訳すかという問題は、それまで長いことわたしの心にかかっており、いくつかの訳例を考えておりましたので、そのなかの一つを即座に口にしてみました。氏は、初めて聞く日本語の響きにびっくりした様子でしたが、それから何かもどかしそうな表情をみせました。この日本語訳は後にまわすことにしまして、氏がそんな表情をしたこと、あるいは、こういう質問をしたことには重要な意味があります。つまり、この一文、日本語では一句といってもいいでしょうが、この一句が作品の底を流れるライトモチーフになっているからです。

それは、もちろん、クラウスがヒトラーという事件に接して、何も感じることなく、考えることもなかったというそのままの意味ではありません。もしもそうであったならば、この作品も、また、のちに言及するこれまた三百ページにのぼる翌一九三四年の『炬火』Die Fackel 八九〇／九〇五号合冊も書かれることはなかったであります。あの時点でのクラウスをめぐる錯綜した状況を背景にした発言であると同時に、かれの長い論争活動をつらぬいている独自のイローニッシュな反論として、この一句は多くのことを窺わせています。そして何

よりも、この執筆された長い作品自体が、かれの韻文集『Worte in Versen』⁽³⁾中の一句(資料プリント[C])⁽²⁾をかりて、*die Fülle seines Werkes* に他ならず、他の論争の機会と同じように、*Mir fällt zu Hitler etwas, oder viel, ein.* だったことを物語っています。事実、この一九三三年の春からおそらく九月末までの数ヶ月間、ヒットラーをめぐってかれの「諷刺の発作」(satirische Anwendung)は激しくかれのペンを駆りたてました。資料プリントの[B]⁽¹⁾は、かなり筆がすすんで、第八段の、オーストリー首相ドルフス擁護の熱弁がふるわれている箇所ですが、ここでクラウスは、あの冒頭のライトモチーフを想起しながら、やや苦笑するような調子で、ここまで二百ページ以上にわたる激烈なヒットラー批判をふり返っています。

さて、Dengler 氏は、この日本語訳をたずねたあとで、こんなことを話してくれました。「戦後、とくに最近、若い研究者や学生たちがしきりにこの句を口にすることが多く、すでにこれが一つの Zitat, あるいは geflügelte Worte となったおもむきがあるが、その場合誤って *Es fällt mir zu Hitler nichts ein.* とか、*Zu Hitler fällt mir nichts ein.* として引かれることがよくある。この句では語順が重要な意味をもっているにもかかわらず……」⁽⁴⁾たしかに *mir* が先置されていることは、論争家クラウスにおけるつねにポジティブな主体性を表徴しているといえましようが、わたしどもが訳すときには、むしろ *Hitler* の前に *ich* と置かれている前置詞 *zu* の働きをどう表わすかに問題があるように思われます。つまり、主体 *mir* と、客体 *Hitler* との関係、言いかえればクラウスの素材へのかかわり方がこの前置詞にこめられているといえるでしょう。余談のようになりますが、だいままえにこの作品の翻訳出版の予告が東京のある出版社から出されまして、そのなかでこの *zu* は「ヒットラーに、抗して」となっていたそうです。あとでふれるように、この句の背後には、たしかに「いまさらヒットラ

ーに反抗してどうなるものか」とか、「俺は反ヒットラー陣営には組しないぞ」というクラウスのイロニーがこめられておりますから、この出版社の訳はあながち否定し去ってしまうことはできません。しかし原文は *gegen* ではなくあくまで *zu* ですから、やはり不適当だと言わねばなりません。いわゆる「考えすぎの誤訳」といえましょうか。この *zu* については、素材性を考えるときにまたとり上げることにいたします。

ところでこの *Mir fällt zu Hitler nichts ein*. の一句は、ヒットラーとナチズムが消滅した第二次大戦後になって急に広く人々の注目をあつめ、青年たちの口の端にのぼっただけではなくて、多数のクラウス研究書やクラウス論のなかに、たとえそれらがこの作品全体と本格的に取りくむことを避けているような場合でも、まるで作品の身代りのように扱われているようです。

それは戦後だけではありません。ナチス支配下の十余年間にも、オーストリーの読者層にはむろんのこと、国外に逃れた亡命者たちや、ドイツ国内の知識人の一部にも、おそらく口伝てに、さまざまなニュアンスをもって広められておりました。たとえば、先ごろ偶然に読んだものですが、ハインリッヒ・ベルの短編 *Als der Krieg zu Ende war* のなかで、作者は、俘虜になってフランスから貨車で送還される一人の小柄でややシニカルな学徒兵を副人物として登場させています。護送列車がライン河をこえて、*Kleve* という町に入ると、つい今しがた「ぼくは学生時代に、ひそかにブレヒトやベンヤミンを読んでいたんだ、トゥーホルスキーやカール・クラウスもね。」と語ったばかりのこの学徒兵は、ふと独り言のようにつぶやきます、*》Zu Kleve fällt mir nichts ein*。(10) 作者ベルはもちろん意識的にあの一句をふまえて、このせりふを吐かせているのでしたが、これはなかなか見事な効果をあげておりますし、*mir* ではなく *zu Kleve* を先置させているところは、このシニカルな青年の軽

率さまで表わされているようです。ところで、ベルがこの短編を書いた一九六二年には『第三ワルブルギスの夜』（一九五五年公刊）はすでに読まれることが可能でありましたが、作中の帰還学徒兵は、終戦直後のことですから、これを読んでいる筈がありません。かれが読んで知っているとすれば、それは一九三四年、つまり『第三ワルブルギスの夜』が書かれた次の年、『炬火』の一冊として公刊された『Warum die Fackel nicht erscheint』のなかの、この同一の句でなければなりません。従って、一九三三年に公刊さるべくして断念された『第三ワルブルギスの夜』の文脈のなかではなく、一年を経過し、しかも公刊されることができた別種の作品中の文脈によってこの句を読んだことになります。この点は、終戦前にこの句を知っていた人々、たとえば、亡命決行のさなかにクラウスにたいして強い関心を示したブレヒトやベンヤミンの場合も同様です。

この問題と関連して、ここで『第三ワルブルギスの夜』の成立について簡単に申しのべることにいたします。

ご存知のように、一九三三年一月三十一日、ドイツではついにヒットラーが政権を獲得し、統合化（*Gleichschaltung*）の波が怒濤のように広がり、ユダヤ人排撃と社会主義者の弾圧がSAの暴力によって強行されてゆきます。クラウスがこの作品の執筆に打ちこんだこの秋までのほぼ半年の間に、作品のなかで直接または間接にふれられている主な政治上の事件だけをあげても、二月二十七日の国会議事堂放火事件、三月十三日ゲッベルスの国民啓蒙宣伝相就任、四月一日のユダヤ・ボイコット行事、五月十日の反ドイツ的書物の公開焼却、五月十七日国会におけるヒットラーのいわゆる「平和」演説、六月二十二日ドイツ社民党の禁止、六月下旬ドイツ・オーストリー間の緊張……といったぐあいに重大な事件が次々に発生します。

一方、クラウスのいるオーストリーにおいては、三月初旬のオーストリー国会の機能停止を機に、首相ドルフスによる強権政治が推進され、反ナチ＝反社会主義のオーストリー祖国戦線結成へと精力的に唱導されておりました。しかし、ドイツにおける成功に勢をえたオーストリー・ナチスト、第一次大戦後長く大きな力を保ってき、社民党勢力とに對するに、カトリックを基盤にする伝統的な保守派キリスト教社会党に加えて帰還軍人の組織祖国防衛隊 (Heimwehr) をバックにしたドルフス政府——この三者の鼎立抗争はなお混沌とした状況にありました。第一次大戦後、大帝國から一小國に転落し、様々な國際勢力に取りかこまれることによって最も複雑な状況のなかにおかれていたこのオーストリーにむかつて、英仏側やチェコ、スイス等に亡命した反ナチス陣営からの Nazi-Greuel の情報が続々に流れこみ、それらは、当時なお多数な占めていたこの國の反ナチ系新聞に連日のように掲載されています。それらに對抗しては、むしろドイツ側からする逆宣伝——ナチス殘虐報道は意図的な誇大宣伝 (Greuel-Propaganda) であるとする——と、ナチス分子の直接の潜入がオーストリー社会に不安を醸成します。このように力が暴威をふるって流血をまねき、嘘偽の言葉と空疎なフレーズが情報の周囲にとびかうとき、それはクラウスにとって、「第一次大戦をひき起しながら、その災厄を生き延びた時代悪が、今また蔓延しようとしている」ことを再認する驚きでありました。

クラウスはその頃、前年にシェイクスピアのソネットの *Nachdichtung* を完成し、この年に入つて、一九二七年以来力を注いできたオツフェンバッハのオペレッタのドイツ語への翻案脚色の仕事が残っており、この仕事と、これも長年の懸案だった言語についての仕事をまとめ上げようとしていました。とくに言語についての論及は一九二五年から、シェイクスピアの翻訳は一九三〇年代に入ってから急にふえておりますから、五十才代の後

半をむかえたクラウスには、ようやく、日常的な素材やジャーナリスティックな事件からいくぶんか離れて、言葉と文学の世界にたずさわろうとする志向が強まっていたのでしよう。しかもこの思いは、ナチズムという「言葉に表わし難い」(unsagbar)「桁はずれな」(inkommensurabel)存在にたいする驚きと一種の無力感によって、いっそう強められていました。クラウスはそれを次のように表現しています、「いったい、ここで精神にとって生じたものは、なおも精神の問題であると言えるだろうか……(中略)……この天変地異のごとき本性の狼藉をまえにして、勇気の問題など存在するだろうか。人間の姿をとったあんな化け物(むろんヒットラーのことですが―筆者注)が、今やことさらに厭わしい思想を啓示し、それどころか思考しているかのごとき外貌をよそおうと企てたとなれば、自分の他のプランを大事にするために『噴火口に唾してはならぬ』という戒しめに従う者として臆病ということにはなるまい。」(S. 10)そして「世界の没落にあたって、わたしは私人の生活に退こう(privatisieren)。」(S. 20)

しかし、「他のプラン」に集中することはクラウスにはできませんでした。ヒットラーという時代の最大の悪をまえにして、かれ自身の論争家魂がそれを許さなかっただけではなくて、外部の世界がクラウスに *privatisieren* することを許さなかったからであります。三十余年にわたって周囲にむかって激しい論争をいどんできたクラウスが、このときにあたっていかなる態度をとるだろうかという関心が、四方から注がれたのは当然です。しかもこの世間の関心には、論争家というものがいつも世間から受けねばならない誤解がつきまとうことが避けられませんでした。

クラウスは、その批判活動を開始した十九世紀末以来、ユダヤ系文士たちによって動かされる頹廢的なヴィー

ン文壇を攻撃し、むしろ、男性的で剛健な文学を求めて初期のハウプトマンの社会劇やリエンクローンの戦争文学などに心をよせ、その後も、ハインリッヒ・ハイネ以来の文学の俗流化を批判し、同時代の Felix Salten, Alfred Kerr らによる文学の新聞文芸 (Feuilleton) 化、劇壇では Max Reinhard らによる観客の眩惑をこととする魔術的技巧に終始鋭い論争の筆を向け、また、これらの文芸傾向の土壌となった読者観客層の世俗的嗜好や、情報や真実を商品と化するジャーナリズム——クラウスはこれを Journal と Kanaille の混交語として Journalle と呼んでいます——にたいして苛責ない憎悪の矢をあげてきました。これらの攻撃の対象となつたものは大部分ユダヤ系の人々でありました。かれ自身がユダヤ人であつたクラウスは、すでに第一次大戦前に Judische Gemeinde を離脱し、カトリックに投じたことがありましたし、また、ちょうどヒットラーのヴィー・ン流寓時代がありますが、のちにナチズムの祖の一人と見なされたオーストリーの神秘思想家 Lanz von Liebenfels から同志として熱烈な賛辞をよせられたこともあり⁽⁷⁾ました。このような経緯にくわえて、かれがこの一九三三年五月、ドイツ学生同盟によって主催された「非ドイツの書籍の公開焼却」から免かれ、ゲッベルスによって作成された、百余名に及ぶ好ましからざる作家のブラック・リストにも含まれなかつたという事実が、当時まだ反ナチスを主流としていたヴィーンのジャーナリズムに、クラウスにたいする不信任を生ぜしめることになつたのであります。たとえば『ヴィーナー・アルゲマイネ・ツァイトウング』というユダヤ系通俗紙は、皮肉な口調でこう述べています、「クラウスの極めて大胆な願望は、ヒットラーによって実現された。ドイツにはもはや Journalle は存在しない。『炬火』の敵どもは、ラインハルトからケルに至るまでことごとく驅逐されたのである……」⁽⁸⁾

一方これとは別に、社会主義者や亡命知識人を主とする反ナチス側の人々のクラウスにたいする期待もかなり

強く潜在していたことは、たとえばあとで触れる『炬火』八九九号の諸引用から明らかです。元来、オーストリアの社会主義者とクラウスの関係は、一九二七年、時の保守党政府とヴィーン警察が労働者のデモ隊を襲って、婦女子を含め九十余名の死者を出した大弾圧事件の直後を除けば、概して冷たい間柄だったといえます。社会民主党指導部にひそむ事大主義的傾向、大ドイツ主義への志向、現実と実行から遊離し空洞化した言葉の世界に自足するかれらの言説は、クラウスの反撥をまねかずにはいませんでした。じじつこの書の第八段において、反ドルフス・反ヒトラーを叫び、自由と民主主義を唱える社民党指導部の大言壮語は、それ自体が両立しえぬ、むしろナチスに対抗する現実的な効果ある行動を妨げる欺瞞にすぎぬものとして、激しい非難が浴びせられています。しかし、これらの非難はもっぱら指導部の言辞にたいするもので、「ナチスの手にかかって苦悩の死をとげる労働者たちと、外国で『闘争』⁹なさっていらっしゃる指導者たちとの差異は厳存する」(S. 100)と述べるクラウスは、じじいに社民党機関誌『Sozialdemokraten』、『Der Kampf』あるいは『Arbeiter-Zeitung』によく目を通し、とくに後者が連日にわたって掲載するナチス残酷事件の報道の努力は高く評価されています。社民党側からのクラウスにたいする気持は、一言でいえば、敬遠すべき煙たい忠告者にたいするそれだったといえましょうが、早くからナチスの興隆を「第一次大戦の失敗によって逆に愚かになるうとする衝動が、今や膨れあがって、最大の国粋運動へ高まってゆく危機」として捉え、「ハーケンクロイツラーに変装した悪魔」の姿にたいする暗い予感をもちしていた忠告者にたいして、まさにこの悪魔の権力掌握に際してこれに筆誅を加える本格的な発言を期待していたことは当然といえましょう。

次に、クラウスの声を促したのは、他ならぬ『炬火』の愛読者たちでありました。クラウスは一八九九年に

『炬火』を創刊して以来、すべての論争活動と大部分の作品をこの個人雑誌に発表してきましたから、そこには自然に Kraus-Anhänger のサークルが出来上っております。Raddatz の引く Egon Erwin Kisch の言によれば「頽廢的な貴族主義者たち、上品ぶって鼻声でしゃべる士官たち、モーレッツに有能な官吏たち、そして気むずかしく意地の悪いプチブル連中^⑩」が『炬火』のまわりに蝟集していたといわれます。反ジャーナリズムのジャーナリストとして、他のいかなる刊行物にも寄稿せず、また他からの寄稿を求めず、自分の作品集の広告を除けばいかなる広告も掲載せず、この個人誌の発行の不定期化、ときには長期間の休刊をも辞せずに、注意深く売文ジャーナリズムに伝染されることを避けながら、三十四年間にわたって『炬火』の孤壘を守ってきたクラウスの周囲には、皮肉なことに 'Fackel-Leser' という思いがけぬ保菌動物が群がっていたといえましょう。『第三ワルブルギスの夜』の第一段にも、このような読者の前に姿をあらわすことへの躊躇が、次のように述べられています。「これこそ思考の蒼白、決意という本然の色彩にうつされた病いに他ならない」——この部分は、シェイクスピアの『ハムレット』の台詞をふまえて、ナチスに抗して発言することを無益と感ずるかれの無力感を表明しています。クラウスはつづけてこう書いています——「そしてこの病いを治すとなれば、読者の励ましすら何の役にもたたぬ。わたしの生きている徴しを見たいという彼らの友情あふれる願いは、究極のところまで考え抜かれた上でのことではなさそうだし、渴望している雑誌を手にとる（この das Heft greifen には「主導権をとる」という「刀の柄」からくる成句が語戲的に皮肉にかけられているでしょうが——筆者註）だけの勇氣が彼らにないとしても、それは決して非難さるべきことではなからう。ところが彼らのなかには、たいへんな向う見ずがかなりいて、わたしはあの危険（つまりナチスの恐怖のことですが——同前）からよりも、この猪突家た

ちから逃げてゐる始末だ。というのも、彼らは本屋に押しかけていって『炬火』が出ていないのを残念がって、『たぶん恐ろしがつて発行をやめたのだな』という推測を残してゆくだろうから。」(S. 14) ここで読者にたいするクラウスの苦いイロニーは一つの認識に到達します、「こんな時代に、こんな信奉者たちの前に姿を現わすのだという意識もまた一つの阻止的なモメントであるかぎりには、彼らのその推測も当たつていよう。そして、ここで確かめられるのは、それら二つの危険がたがいに照応し合っているのだという認識そのものである。」(世界にあらゆる災厄が生じたのは、この世界についての想像が余りにも乏しかったからだ。)」

つづいて述べられるクラウスの言葉のなかに、もう一つ注意すべき点があります。すなわち「それにもかかわらず、わたしは読者たちの勇氣にたいして恥ずかしい思いをしてはなるまいから、この試みを企て、また、銅貨をほうりこむのと引き換えに意見の提供を期待するような男たちの目を、これまたオートメーションさながらな事件の奥にひそむものへまで注がせることとなろう……。」「銅貨をほうりこむのと引き換えに意見の提供を期待する」とは、現在でもヴィーンの街頭に見かける無人の新聞販売具から新聞を買うことをいいますが、この一節には、公衆にたいして意見を売りつけるジャーナリズムと、この意見を読むことによって世論 (öffentliche Meinung) へと雷同してゆく Publikum にたいするクラウスの終生にわたる批判を見てとることができます。

「意見」(Meinung) とは、クラウスによれば、何らかの特権によって得られる情報と知識を操作することによって、あらゆる自己の責任と他人への共感を回避しようとする、しかも社会に認知さるべき言説にすぎず、そこには、権威を勾わせるしかつかめらしい外貌にもかかわらず、毒にも薬にもならぬ空虚なフレーズが跳梁します。他方で、この売り物となった意見を買う読者はまた、銅貨と引き換えに、この意見に安堵と責任回避の保証を見

出して満足するわけでありませう。「ヒットラーについての貴方の御意見は？」とか、「ヒットラーにたいしてどんな態度をおとりですか？」といったヴィーンの公衆とジャーナリズムを賑わせたにちがいない問いの前に、クラウスが示した反撥の感情とイローニッシュな韜晦の態度は、この作品の冒頭の一文につづく部分（資料プリント〔A〕（1））からもうかがわれます。

このように、*Mir fällt zu Hitler nichts ein.* の一句には、クラウスにヒットラーの祖を見ようとするヴィーン・ジャーナリズムのクラウス観、逆にクラウスをおのれの陣営に引き入れようとする反ナチ側の期待、さらに『炬火』愛読者たちの危険な督促などが四方から迫り、意見や態度表明の圈内へかれを引きずり込もうとする攻勢にたいする、かなり強い韜晦の念がこめられていることがわかります。

く、ら、ま、し、ないし *Manöver* ともいえる論争家クラウスのこの表現は、もう一つ重大な対象に向けられています。それは、言うまでもなく、ナチスとその暴力にたいするそれでありませう。この点は、Harti 氏の強調をまつまでもなく、クラウスがみずからこの労作の発表を断念したことにふれて編者 Heinrich Fischer の後記には、クラウス自身がもらした次のような言葉が想起されています。「この書は、とりわけ啓蒙宣伝相ゲッベルスの『メンタリティー』についての叙述を含んでいる。かれがわたしの文章を目にするならば、怒りにかられケーニヒスベルクの五十人のユダヤ人を強制収容所の立棺のなかへ送りこませるようなことが起るかもしれぬ。わたしはどうやってその責任をとることができようか。」(S. 308) かつて『検閲官が理解するような諷刺は禁止されて然るべきものだ。』⁽¹¹⁾ という警句をものしたところのあるクラウスにとって、粗暴で無教養なナチスの目をくらます自信は十分にあったであらうでしょう。SAの検閲官であれば、あの冒頭の一文によってこの作品を可とするこ

ともありえたでしょう。しかしそれが、ナチスきつてのインテリであり、人間心理の皮肉な觀察家であり、表現主義思潮の鬼子であったゲッベルスであったならばどうか。そして、次第に筆が激して、ナチス指導部の嘘言や強制収容所の残虐に直接及んでゆくとすればどうか。あの一句は、何よりもまずナチスの目をそらすとする韜晦の言葉だったことは明らかです。

このように躊躇と韜晦によって始められたこの書は、第二段以後、それらを振りきって激しい勢いで書き上げられてゆきます。同年の秋『炬火』八八八／九〇七号として公刊さるべく、作品はすでに活字に組まれ、ゲラ刷りには、これまでつねにそうであったように、綿密な推敲の筆が入れられたにもかかわらず、その刊行は断念されました。そして、クラウスの化身ともいえるこの作品は、クラウスの死後にもなお、戦後一九五二年、編者フイッシャーの尽力によってクラウスの選集第一巻としてドイツ語圏に帰るまで、ナチスの手を逃れていわば亡命の十余年を送らねばなりませんでした。

『第三ワルブルギスの夜』が発刊される筈だった一九三三年十月、クラウスの年来の友人だった建築家 Adolf Loos の死を悼んで出された『炬火』八八八号は、僅かに二ページの弔辞と、資料プリント〔A〕〔2〕にかかげた十行の詩のみから成っていました。

聞わないでほしい、このときにあたり私が何をなしたかと。

私は沈黙をまもる、

そしてそのわけを語らない。

静寂があるのは、地球がすさまじい音をたてて砕けたからだ。

この有様になう言葉はなかった、

われひとはただ眠りのうちから語るばかり。

そしてかつて輝いた太陽を夢みる。

事態は過ぎ行き、

後になれば同じことだった。

あの世界が目覚めたとき、言葉は永遠の眠りについた。

——この詩こそ、まさしくこの時にあたって世に生れ出るべくしてついに沈黙のうちに退いた『第三ワルブルギスの夜』の形見だったといえましょう。ところが、クラウスの声を求めていた周囲の人々のこの十行の詩にたいする反響は、多くは当然のごとく否定的であり、とくに亡命文学者たちの失望は大きかったらしく、それはクラウスにたいする告別の言葉 *Nachruf* の観を呈しました。(かれはそれらの反響を『炬火』八八九号に集録しています) なかには、これまでも諷刺論争家クラウスにたいする反響がしばしば見せたような、皮肉な調子をおびたものもありました。たとえば、この十行詩をもじった安直なパロディー詩などは、⁽¹²⁾クラウスがこの書のなかで「世間は亡命者のすべてを優れた人物、あるいは才能ある者であるかのように取り違えてしまう傾向がある」(S. 27)と述べていることをうなずかせます。あの十行の詩をささえているものが二九〇ページ約一万行をこえる沈黙の言葉であったことに気づいた人は多くはいませんでした。ブレヒトはこの詩に接して次のように応えています。⁽¹³⁾

第三帝国が築かれたとき

雄弁な男から届いたのはほんの小さな報せだった。

十行の詩となって

あげられたかれの声は、ただ一つ

おのれの声の足らざることを嘆くばかり。

(中略)

声が出ぬことを

雄弁な男が詫びたとき

沈黙は裁判官席の前へすすみ出た

顔からヴェールをとり

みずから証人たることを明したのだ。

ところで、あの十行の詩にたいする反響、とくに誤解や揶揄はクラウドをかりたて再びベンをとらせます。その間ほぼ一年が経過しておりますから、むろん政治情勢も急転し、ドイツでは、Nazi 支配体制の定着、一九三四年六月末にはレーム肅清事件があり、オーストリーでは、二月に社民党 (Sozial) と労働者組織による武装蜂起の失敗という大きな事件があり、ついに七月二十五日オーストリー・ナチスの一揆による首相ドルフス暗殺へと

つながってゆくわけであります。この暗殺事件の起る直前、クラウスの十行詩にたいする反響を集録した『Nachruf』(『炬火』八八九号)を予告号として、数日おいて大冊『Warum die Fackel nicht erscheint』(『炬火』八九〇/九〇五号)が公刊されます。

作品『第三ワルブルギスの夜』の後に生誕を果した、いわば弟ともいえるこの『炬火は何故発行されないか』について、とくにこの兄と弟との差異について分析するならば、K・コーンもいうように¹⁴きわめて重要な問題が生ずるにちがありませんが、それは別な考察にまたなければなりません。ここではただ、後者にあつて *Mir fällt zu Hitler nichts ein.* の一文が、対 Nazi, 対 Sozi という概括をあとに従えていること、そしてこの一文に代つて冒頭には、『炬火』発行所から読者に宛てた仮空の手紙形式を示す呼びかけが置かれ、ついで例の一文までさらに一ページ半にわたつて、クラウスの沈黙を非難した者たちに対する反駁が書きつらねてあるという指摘にとどめたいと思います。つまり、『第三ワルブルギスの夜』におけるごとく、ヒットラーという Elemente に対抗するのに、これまた激しい四大によって反撃するよりも、やや概念的な把握の態度へと傾いていること、ゾチ批判がナチ批判と並んで強く前面に押し出されていること、クラウスの真意を忖度し誤解するジャーナリスティックな周囲にたいする苛立ち、ナチスの危険にたいするいっそう慎重な韜晦が見られること……これらの点もすでにこの冒頭部分は物語っているように思われます。前に例としてあげたベルの小品中の帰還学徒兵も、またこれまでクラウスを高く評価しながら、一九三四年のクラウスにたいして大きな失望を洩らしたベンヤミンも、この『炬火は何故発行されないか』のなかに、わたしどもが今論じているのとはかなりニュアンスを異にする *Mir fällt zu Hitler nichts ein.* の声を聞いたのであります。

作品の成立につきましてはこのぐらゐにして、ふたたび例の一句に帰って、素材とクラウスの關係について考えてみます。

たしかに *Mir fällt zu Hiler nichts ein.* という文は、以上に述べたような背景とクラウスの屈折した氣持によつて發想されたものでありますが、しかし、*Es fällt jemandem etwas ein.* という表現は、むしろごくふつうに日常生活においても頻繁に用いられるものです。《jm. in den Sinn kommen》に近い言いかたでしょうが、*einfallen* にはもっと突然の、外からやってくるものになつてゐる反応といった感じがあるようです。クラウスはみずから「書くことを俳優のように演じる最初の作家だ」と称しておりますから、ここでも、ある渡しの台詞 (*Stichwort*) を聞いてただちに動作を起す俳優の演技にこの *einfallen* を喩えることができるかもしれません。

したがって、クラウスがしばしば用いる *Es fällt mir etwas ein.* には、もともと、概念的なまとまつた事柄にたいする *über* とか、*betreffs* は当りませんし、*gegen* や *für* でしたならば、前もつて対立的あるいは好意的な感情や觀念が先入していることになり、精神の働きは二段になつてしまひます。Bei の用例がよく辭書にのつていますが、これは、ある時点での個々の事例に際してということですから、くり返し唱えられ、次第に高まつてゆくヒットラーの名、次々に押し寄せてくる素材の洪水にたいしては用いられることができません。ある対象に直接かかわる主体の、その場のアクチュアルな思考や反応という關係を表わすには、やはりこの *zu* でなければならぬでしょう。

それは、主体の素材にたいするかかわり方というよりも、むしろ逆に、素材が主体に襲いかかつてかれをして

応接に暇なからしめる、といったほうが適當かもしれません。素材に攻めたてられ、ヒットラーに襲撃されるクラウスという意味でのアクチュアルな関係は、プリント〔C〕(1)に引用した『Arbeit』の一節「私の胸に浮かんできた／破壊的な力をふるって私を撃った。」からも窺い知ることができ、冒頭のある一文につづく引用〔A〕(1)の最後の部分「わたしは面と向って殴られたように感じている。」は、この論争家主体と素材との間の激しい緊張関係を示すものに他なりません。

ところで、この素材とクラウスの間のアクチュアルな関係は、この作品がもっている最も重要な意義であるといふことができます。わたしどもは、第三帝国の崩壊後になって公刊された数多くのナチス批判の書を知っています。そして、ナチスの嘘偽と野蠻は徹底的に暴かれ、歴史的観点からするナチズムの評価は、その否定的方向においておよそ一致しているようにみえます。しかし、それらの試みがどんなに深い怒りと直剣な反省によっておこなわれたものであっても、また、それが危険に実際に直面した体験に裏うちされたものであろうとも、やはり、過ぎ去った恐怖をふり返るといふ、いわば安全な場でなされていることを感ぜずにはいられません。そしてこのことは、『第三ワルブルギスの夜』の編者ハインリッヒ・フィッシャーによるこの作品の題名変更にもかかわる重要な問題であります。フィッシャーは、「元来この作品の題は、あきらかに『ワルブルギスの夜』と『古代ワルブルギスの夜』のクライマックスとして、『Dritte Walpurgisnacht』と無冠詞になるべきものであろうが、いまは歴史的なパースペクティヴからいって、定冠詞付きの『Die Dritte Walpurgisnacht』に変更することを適当と考える。」(S. 309)と説明しています。しかしこの変更によって歴史的・概念的把握が強調され、眼前の対象への驚きに発する直接性が失われてしまうのではないのでしょうか。クラウスは一九三三年というナチスの権

力掌握、弾圧の最高潮の時点でこれを書き、もしもこれが予定されたとおりに発表されていたとすれば、魔の手は確実にクラウスらに及んでいたのでありましょうし、また逆に、かれのペンは、これまでつねにそうだったように、これも確実に敵に痛手を与えていたにちがいありません。そしてこれを読む者たちは、否応なく時代の問題に直面することを迫られていたでありましょう。

しかし、この無冠詞の題名と冒頭の一句が、たんに情況や素材にたいする主体 *mir* の直接的な叫びや独白にすぎぬとすれば、作品の世界が成立しえなかったことは明らかです。かれは筆がかなり進んでいったところで、素材の氾濫にふれて次のようなことを言っています。——ちょうど *einfallen* の用例としてあげたプリント [B] (2) でありますが——「現存するもろもろの事物とその否定者との間には、あるひそかな了解が支配している。つまりこれらの事物は諷刺を自給してくれるのだ。そして素材は、わたしがかつてそれを伝達可能で信ずるに足る、だが同時にまことに信じ難いものとするために、素材を見て選びとらねばならなかった形式を今また完全に具えているのだ。とあればもう私という存在は必要ではなく、素材にふれてわたしの心に思い浮かぶことはもはや何もないのである。」ここで「その否定者」とあるのは、むろん、*Zeinsager* と揶揄されたクラウス自身であり、「形式」とは、あの第一次大戦を素材としたかれの長大な作品《*Die letzten Tage der Menschheit*》(一九一八／一九一九)のとした *Lesedrama* 形式を指しています。ところで、「わたしはもう必要ではなく、素材にふれてわたしの心に思い浮かぶことはもはや何もない」という言葉は、*Mir fällt zu Hitler nichts ein.* の一句に新たな意味をつけ加えています。すなわち、意図して素材自体に語らせよう、ヒットラーやその一党、さらにナチ

ズムになびくイデオロクや文士たちの語るところを引用 (zitieren) し、この引用技法によって作品形式を成就させようというのであります。⁽¹⁸⁾

『人類最期の日々』の場合にも、クラウスは長い期間にわたる素材の収集選択のうちに、もろもろの事件をめぐる多数の発言や記事それ自身に語らせ、またそれらを日時と場所に結びつけるために Lesedrama という形式をとりました。そこには五幕二〇九場にのぼる場面が設定され、第一次大戦期のオーストリー帝国の大ドキュメントが人類没落の相のもとに展開されておりますが、形式上の特色としましては、クラウス自身を代弁する Nörgler が当時の平均的なオーストリー人を思わせる Optimist を相手に弁じたてる対話場面が処々に挿入されていることが目につきますし、終幕近くではそれが Nörgler の一人舞台となって長広舌がふるわれています。これは、あ的一句の mir と zu Hitler との関係を借りていえば、zu Hitler という素材に語らせるだけで足りなかった mir が、所々に顔を出して言挙げをやっていると見ることができましよう。

一方、『第三ワルブルギスの夜』においては、この mir と zu Hitler の関係はより緊密に結ばれています。ここではクラウスは、Lesedrama 的な形式ではなく、そのもっとも得意とする論争文形式にかえることによって素材を自家薬籠中のものとしています。Zitieren の技法は限定された場にしばられることなく次々に関連の環を広げ、連想は自在に伸びてゆきます。そして、引用される言辞の前後には、同音異義化 (Homonym) 、混交語化 (Kontamination) 、意図的な多義化 (Amphibolie) 、矛盾形容 (Oxymoron) 、前辞反覆 (Anadiplose) 、愚化引用 (Ad-absurdum-zitieren) など、クラウスの言語才能に感嘆せざるをえない華麗な Figuren が繰り広げられています。もちろん、この「真剣な言葉遊び」(フィッシャー) は同時に、病菌に犯され空洞化された言葉

にたいする、いわば衝撃療法に他なりません。クラウスのメスによって病んだ文章や言説から多量の引用が切り取られ、Figurenの液に浸され、あるいは隔字体という拡大鏡のプレパレートに置かれるとき、たちまち患部が露呈されてくる……と喩えることができます。クラウスを論じる場合、このWerkünstlerとしての引用技法を考察することが、もっとも中心的な課題となるだろうと思われます。

このようにして自立させられた素材は、やがて具体性と個性性を離れて、典型へ、ジャンルへと高まってゆきます。einfallenの用例としてあげたプリント[B](3)は、クラウスの年来の宿敵であったAlfred Kerr (Dummkopf)とMax Reinhard (Schwindler)とがナチスに逐われた今、むしろこの二人を擁護したいという件りでありますが、ここにはまた典型化の消息が予感されています。「諷刺家にとっては、個々の事例を片づけるよりも見本を保存することが肝要なのだ。それがジャンルとしての悪を描く可能性となる」という確認は、三十年このかた激烈に個々の事例に食いつき、つねに実名をあげて個人を論難してきたクラウスの口から聞くにしてはやとりすました、諷刺評論家の口調にも響きますが、論争の相手が、いま偶然に他の方面から憎悪を共有することとなった巨大な悪の犠牲とされたとき、この諷刺家を襲った空虚で複雑な悲しみが、そしてまた、三十余年にわたる自分の論争活動をふと振りかえった感慨がかれの口をついて出たのでありましょう。しかし、これは一方では、素材にたいして執拗な論難をこととしたephemerな諷刺家のなかに同時に存在している、普通の典型を予感する作家意識でなければなりません。ジャンルとしての悪の描写を志向するこの作家意識を、クラウスは、すでにあの大戦ドラマと取りくんでいたころ、アフォリズムのなかに次のように強調しています。「素材を知る

ことによってわたしの仕事を理解しようとすれば、それはむしろ困難をまねく。實在するものは先ず虚構されなければならぬということ、そして、それを虚構するということはやり甲斐のある仕事だということを人々は知らない。人物たちをまるで彼らがそこにいるかのように仮構する作家の場合よりも、あたかも自分によって仮構されたかのごとき人物たちを眼前にしている諷刺家のほうが、より大きな力を必要とするのだ。」ここに表出されている諷刺家の力への矜持と、論難をややすると個々の素材とクラウスとの間の確執という低次元でとらえがちな世間にたいする反撥とは、作品意識にささえられたこの諷刺家の面目を物語っているといえましょう。このようにして、素材は作品形式、典型の背後へと退いてゆきます。

かくてクラウスの諷刺論争は、かれがしばしば述べたように、原因となった素材から遠ざかれば遠ざかるほどその効果を高めてゆくでありましょうし、事実、ヒットラーとナチズムが消滅した戦後七年をへて初めて発表された『第三ワルブルギスの夜』は、今後いっそうその価値を高めてゆくにちがいありません。

最後にこの問題とも関連して、クラウスにおける「典型」の成否と、「社会的諸力の認識」の有無を疑う、プリント[D]にひきましたラダツのかなりイローニッシュなクラウス論について、むろんこれに反論するにはなお論証を必要としますが、次のような点を簡単に申し述べて、作品全体の紹介を兼ねたいと思います。

まず、ヒットラーという Ereignis から Typ への昇華は、「社会的諸力の認識」を前提とするていのもではなく、その言葉への批判がそのままナチズムの本質の把握とナチス的人間の典型化となる、という文学本来の機能によるものであるということ。

そして、この機能の發揮が、逆にナチズムという Irrationalismus —— ラダツはクラウスの非合理性を言っています——を見抜くクラウスの認識力を高めてゆくこと。ちなみに、第一次大戦後のドイツ国民の動向や、オーストリーの混沌たる社会的諸力への洞察は、同時代の多くの批評家や史家にもまさるものでありましようし、それが同時にナチスの未来への的確な予言ともなっています。⁽¹⁸⁾

さらに、クラウスの文学精神、つまり主体 mir を満たしているものは、プリント[B] (2) にも見られるような人間同胞への共感であり、その Humanismus は、作品中に浸透しているラテン文学、シェイクスピア、ゲーテと連なるヨーロッパの人文精神の伝統に根ざすものであること。

以上ですが、最後に、Mir fällt zu Hitler nichts ein. の平凡な訳例をもって終りとします。この冒頭部についてつきせりに Kopf, Stirn, Gehirn が並ぶおもしろいところを生かして、「ヒットラーと聞いてもわたしの頭に浮かぶことは何も無い。」

——昭和四十九年六月 於・京都ドイツ文学会

〔資料プリント〕

Karl Kraus (1874—1936):

(Die) Dritte Walpurgisnacht (geschrieben 1933, veröffentlicht 1952)

Beitellung der Abschnitte (nach Edwin Hartl):

- I) Mir fällt zu Hitler nichts ein. II) Diebold und andere. III) Die Philosophie. IV) Benn, Papen, Nationaljuden. V) Der Penklub und andere. VI) Die stilistische Technik der Lügen. VII) Das KZ,

Der Pranger, Die Rassenschande. VIII) Oesterreich. IX) Die verdorbene Gehirnmaschine. X) Zusammenfassung.

(A) 1) (*Die*) *Dritte Walburgisnacht* (Sommer 1933, unveröffentlicht):

Mir fällt zu Hitler nichts ein. Ich bin mir bewußt, daß ich mit diesem Resultat längeren Nachdenkens und vielfacher Versuche, das Ereignis und die bewegende Kraft zu erfassen, beträchtlich hinter den Erwartungen zurückbleibe. Denn sie waren vielleicht höher gespannt als jemals gegenüber dem Zeitpolemiker, von dem ein populäres Mißverständnis die Leistung verlangt, die als Stellungnahme bezeichnet wird, und der ja, sooft ein Uebel nur einigermaßen seiner Anregbarkeit entgegenkam, auch das getan hat, was man die Stirn bieten nennt. Aber es gibt Uebel, vor denen sie nicht bloß aufhört eine Metapher zu sein, sondern das Gehirn hinter ihr, das doch an solchen Handlungen seinen Anteil hat, sich keines Gedankens mehr fähig dünkt. Ich fühle mich wie vor den Kopf geschlagen,

2) "*Die Fackel*" Nr. 888 (Oktober 1933)

Man frage nicht, was all die Zeit ich machte. / Ich bleibe stumm; / und sage nicht, warum. / Und Stille gibt es, da die Erde krachte. / Kein Wort, das traf; / man spricht nur aus dem Schlaf. / Und träumt von einer Sonne, welche lachte. / Es geht vorbei; / nachher war's einerlei. / Das Wort entschiel, als jene Welt erwachte.

3) "*Die Fackel*" Nr. 889 (Mitte Juli 1934) »Nachrufe«

4) "*Die Fackel*" Nr. 890 / 905 (Ende Juli 1934) »Warum die Fackel nicht erscheint«

(B) aus »*Dritte Walburgisnacht*«:

1) Daß ich gegen Dollfuß keiner satirischen Anwendung fähig bin—während mir zu Hitler im Zuge der Betrachtung vielleicht doch etwas eingefallen ist,—daß ich trotz den »Letzten Tagen der

Menschheit« einen Spott verschmähe, den ich jüngeren Talenten vermacht habe, damit sie ihn bei Lebensgefah*r* gegen den Retter verwenden: solches mag sie noch verlocken, ihn gegen mich zu lenken,..... (S. 216)

2) Es walzet ein geheimnisvolles Einverständnis zwischen den Dingen, die sind, und ihrem Leugner: autarkisch stellen sie die Satire her, und der Stoff hat so völlig die Form, die ich ihm einst ansehen mußte, um ihn überlieferbar, glaubhaft und doch unglaublich zu machen: daß es meiner nicht mehr bedarf und mir zu ihm nichts mehr einfällt. Denn das Gehirn erwacht nicht wie die Nation, es fühlt die Zurücksetzung durch die Natur, und wenn es vollends die Pflanze um die Lebenskraft beneidet, der sie auch im unheiligen Jahr den Frühling nicht versagt hat, so ist es nur des Gedankens fähig an die Mitgeborenen, die ihn dank einer Erweckung in Folterkellern verbringen müssen. (S. 16f)

3) Und besonders, weil wie gesagt seinem Naturhang zufolge ein Satiriker mit der Verminderung seines Besitzstandes nie so recht einverstanden ist, indem es ihm doch nicht um die Erledigung des Einzelfalls geht, sondern im Gegenteil um die Bewahrung des Exempels als eine Möglichkeit, daran das Uebel der Gattung darzustellen, womit er niemals zu Ende kommt noch kommen möchte. Denn solange ihm zu einem Dummkopf etwas einfällt, solange ein Schwindler vorbildlich wirkt, muß er um die Erhaltung besorgt sein, und man ahnt nicht, wie bange Zeiten da unsereins durchmacht. (S. 26)

[C] aus »*Worte in Versen*«:

- 1) Es engt mir allen Lebenstag, / es drängt mir zu bis in den Schlaf, /
und ob ich auch entinnen mag: / es denkt in mir ohn' Aufenthalt /

und alles was mir einfiel, traf / mich mit vernichtender Gewalt. / (『Arbeit』)

2) Die Fülle meines Werkes ist ungemein.

Mir fällt zu jedem Dummkopf etwas ein. (『Produktion』)

(D) Fritz J. Raddatz:

Untüchtliches Zeichen des Irrationalismus ist die Personalisierung jedes Problems.... 『Erst die wirkliche Erkenntnis der Naturkräfte vertreibt die Götter oder den Gott aus einer Position nach der anderen』 (Engels). Auf Kraus angewandt hieße das, seine Mini-götter und Zwergdämonen wären vom 『Ereignis』 zum Typ avanciert, zum Repräsentanten, wenn Kraus 『die Naturkräfte』—also die Kräfte der Gesellschaft—erkannt hätte. Es wäre ihm, wer weiß, vielleicht sogar etwas zu Hitler eingefallen.... (『Der blinde Seher: Karl Kraus』 in: Verwerfungen, 1972, edition suhrkamp 515, S. 16)

(註)

- (1) この点でもっとも驚かされたのは、この一九三三年ドイツを逐われた亡命ユダヤ人たちの手によってパリで出版された、ナチス残虐行為の生々しい記録書であり、同時に抗議の書でもある Braunbuch I: Ueber Reichstagsbrand und Hitlerterror. hrsg. vom Welkomitee für die Opfer des Hitlerfaschismus, Verlag Edition du Carrefour, Paris, 1933 が、ヴァーレン市立図書館に残されていたことであった。『第三ワルプルギスの夜』においてとり上げられているいくつかの事例からみて、クラウスは執筆当時すでにこの記録書に目をおしていたものと推測される。
- (2) この期のクラウスに精しく、また、青年時代にクラウスと個人的な接触のあった Edwin Hart 氏が筆者に語ってくれたところによると、一九三八年オーストリーがドイツに武力併合された直後、クラウス生前の弁護士であり、その蔵書や草稿を保管していた Oskar Samet 博士の私宅——博士はその一室にクラウスの書斎を再現していた——が SA によって襲われ、この作品の草稿を含めてすべての所蔵品が運び去られたということである。なお、それ以前にハルトル氏はこの作品の二つの Umbruch を実見していたが、そのうちの 하나가、ナチス侵入の直前にクラウスの

Mir fällt zu Hitler nichts ein

- 友人であり外交官であった Prinz Max Libkowitz の手記をスミレから出され、のちにニチエーニクに亡命した Samek 博士のもつて保管をなした。C. Kohn や H. Weigel の研究書にも詳しく。(Caroline Kohn: Karl Kraus. Stuttgart, 1966, S. 161f.; Hans Weigel: Karl Kraus oder die Macht der Ohnmacht. Wien, 1968, S. 333f)
- (c) K. K.: Worte in Versen. 9 Bde. 1916—1930 (7. Bd. der Werke v. K. K.) Kösel Vlg. München, 1959 年『炬火』に発表された詩を集成したものだが、そこには、かれの論争文には見られないような内面の吐露や、自分の仕事や方法への省察がみられ、その点でクラウスの創作活動を考える貴重な手がかりが得られる。
- (4) この Dengler 氏の指摘は、二年後 Edwin Hartl 氏が Fritz von Raddatz のクラウス批判にたいして加えた反論のなかにあらわし、重なる議論をうけて攻撃をうけた。(Edwin Hartl: Ueber Falschzitate. in: Die Peststühle. Wien, Heft 6, April/Mai 1973, S. 523ff)
- (5) Heinrich Böll: Als der Krieg zu Ende war —In: Als der Krieg ausbrach, Erzählungen. DTV Nr. 339, S. 27f.
- (6) フォルトンについて後述(21)参照。マンヤンゲンが、たゞし一九三一年、すべむたマンヤンゲン(Walter Benjamin: Karl Kraus. Allmensch-Ummensch-Dämon. —In: Frankfurter Zeitung. Frankfurt / M., Jg. 75, 1931, Nr. 183—205) を発表したが、一九三四年九月、亡命先のスウェーデンから友人にあつて「クラウスの転向」を嘆じた手紙を添へて。W. B.: Brief an Werner Kraft. Svendborg, 27. Sept. 1934. In: W. B. Briefe II. hrsg. von Gerschom Scholem und T. W. Adorno, Suhrkamp, 1966, S. 623
- (7) Jörg Lanz von Liebenfels: Antwort auf Rundfrage über Karl Kraus. —In: Der Brenner. Innsbruck, Jg. 3, 1912/13, H. 18 v. 15. Juni, S. 847f.
- (8) Kleines Geburtstagsgeschenk. (gez. ?) p. d. —In: Wiener Allgemeine Zeitung. Wien, Jg. 54, 1933, Nr. 16467 v. 21. April, S. 1 クラウスの作品中には、Sechs-Uhr-Blatt のように別名で出され、この通俗新聞で、有名人のふりかへを採録する。Die Stunde や Der Abend などのように、かゝる辛辣な反ナチス傾向を示した。
- (9) K. K.: Hüben und Drüben —In: Die Fackel. Nr. 876/84, Okt. 1932
- (10) Fritz J. Raddatz: a. a. O., S. 10
- (11) K. K.: Beim Wort Genommen. (3. Bd. der Werke v. K. K.) Kösel Vlg., München, 1955, S. 224

- (12) Zwei Grabreden auf Karl Kraus. —In: Neue Deutsche Blätter, Prag, 15. November 1933. このプロデューサーは、
 warum / er schweigsam wurde, da die Erde krachte: / Er floh in Schlaf / nur weil s e i n Wort nicht traf /
 Die Fackel starb. Die Sonne Hitlers lachte. / Karl Kraus? Vorbei! / Uns ist's nicht einerlei, / daß er entschlief,
 als Barbarei erwachte.
- (13) Bertolt Brecht: Ueber die Bedeutung des zehnzeiligen Gedichtes in der 888. Nummer der Fackel. —In:
 Stimmen über Karl Kraus. Wien, Verlag Lanyi, 1934
- (14) Caroline Kohn: a. a. O., S. 294
- (15) K. K.: Beim Wort Genommen. a. a. O., S. 334
- (16) この書はクラウスにちよつと用かれ、批判をうけてゐる主な親ナチ・イデオロクや文士は、Oswald Spengler,
 Martin Heidegger, Gottfried Benn, Bernhard Diebold, Rudolf Binding, Max Naumann, Hans Johst, Hans
 Heinz Ewers 等。
- (17) K. K.: Beim Wort Genommen. a. a. O., S. 322
- (18) クラウスはむしろ「予言家」ではなかったが、この作品中でかれの鋭い目によって正確に言い当てられている事実に
 は次のようなものがある——パーペン、ノイラート、フーゲンベルクらナチスに迎合し、利用されていた貴紳政治家
 たちの左遷・没落。ナチスとクルップ、A. E. G. 等、大企業との妥協。S. A. に代るS. S. の抬頭。そしてナチス・ドイ
 ツの究極的な倒壊。